目次

序……平山輝男…1
序文――助詞研究と言語表現への視点――……外間守善…5
自序……10
第一章　『おもろさうし』の助詞「が」と「の」……3
はじめに…3
一　「が」「の」の用例の抽出…4
二　「が」のうける形式…7
三　「が」の用法…25
四　「の」のうける形式…33
五　「の」の用法…43
六　重複語彙の検討…51
七　まとめ…76
第二章　『おもろさうし』の助詞「は」……80
はじめに…80
一　とりたての「は」…82
二　終助詞の「は」…97

三　まとめ…97
第三章　『おもろさうし』の係助詞（一）……99
はじめに…99
一　係助詞「す（こそ）」…99
二　助詞「ちよ」について…124
第四章　『おもろさうし』の係助詞（二）……145
はじめに…145
一　係助詞「と（ぞ。強調）」…145
二　係助詞「か（疑問）」…181
三　係助詞「も（合説）」…194
第五章　『おもろさうし』の助詞と現代琉球方言の助詞……202
はじめに…202
第一節　格助詞…203
第二節　連体助詞…246
第三節　副助詞…256
第四節　係助詞…262
第五節　接続助詞…266
第六節　準体助詞…278

第七節　並列助詞…281
第八節　終助詞・間投助詞…284
おわりに…318
第六章　表現と社会——助詞の側面から……321
第一節　助詞「が」「の」の用法の変遷…321
一　奈良時代の「が」「の」…321
二　『おもろさうし』の「が」「の」…323
三　現代琉球方言の「ガ（が）」「ヌ（の）」…325
四　「が」「の」の表現と社会…333
第二節　現代語における助詞「の」の表現…338
一　現代共通語における連体助詞「の」の表現と「の」の準体助詞化…339
二　現代琉球方言における連体助詞「ガ」「ヌ」の表現と「ヌ」の準体助詞化…349
三　「の」の内包性と社会…359
第三節　現代語における助詞「は」の表現…360
一　現代共通語における「は」の表現とうなぎ文…360
二　現代琉球方言における「ヤ（は）」とうなぎ文…369
三　うなぎ文と社会…373
第七章　表現と社会——語彙的側面から……375
第一節　代名詞…375

一　人称代名詞…375
二　「自分」「人」…379
三　指示代名詞…385
四　代名詞と社会…391
第二節　聞き手に移行した「我」の表現…392
一　クーン（来る）…392
二　リーン（れる）…393
三　トゥラスン（取らす）…394
四　敬語…397
五　まとめ…398
第三節　琉球方言の動詞終止形…400
一　琉球方言の終止形の実態とその成立過程…400
二　終止形の表現と社会…404
第四節　挨拶のことば…405
一　挨拶のことばとその類型…405
二　相手との同一化志向（ウチ領域の拡大）…422
第五節　「しなて」の表現…424
一　「しなて」の語義…424
二　「しなて」とみる対象…425
三　「しなて」と社会…444

四　現代方言における「シナユン（合う。調和する）」…456
第六節　『おもろさうし』における調和構造…458
一　とこゑやりかわちへ／ゑりちよやりかわちへ…458
二　みこゑあわさたな／ゑりちよあわさたな…462
三　おことあわしよわちへ…463
四　あまこあわち／みかうあわちへ…467
五　調和の構造…472
第七節　「チム（肝・心）」の表現…474
一　「チム（肝・心）」の表現…474
二　「チム（肝・心）」と共同体社会…486
第八節　表現と社会――琉球方言と共通語…487
第八章　アマミヤ・シネリヤ考……491
はじめに…491
一　アマミヤ・シネリヤの語源…491
二　太陽と対語…511
索　引……526
あとがき……538

琉球方言助詞と表現の研究

本稿では、『おもろさうし』に用いられている「は」の用法を対象にしている。おもろには、とりたての働きをする「は」、終助詞の働きをする「は」が見出されるが、その中でとりたての働きをしているものが圧倒的に多い。そこで本稿では、おもろで用いられているとりたての「は」にも、国語と同様、主に次の三つの用法が認められることを明らかにしたい。

1　格を表しえない。

2　とりたての働きがある。

3　とりたてられたものは題目となり、「題目―解説」の構文をつくる。

その中で、2のとりたての働きはもっとも基本的なもので、これについては比較的詳しくみていくことにする。なお、国語の「は」については、拙著一九八四を参照していただきたい。また、本稿で用いるおもろの資料は、すべて仲原善忠・外間守善一九六五・一九七八に負う。おもろの意味解釈にあたっては、外間守善一九七二を参考にした。

一　とりたての「は」

1　『おもろさうし』の「は」の使用状況

『おもろさうし』における「は」の用法を探るためには、まずもってその用例をすべて取り出してみる必要がある。そこで、筆者は仲原善忠・外間守善一九六五によって、一番の歌から最後の一五五四番の歌に至るまで逐次あたって、「は」の用例をすべて抜き出す作業を行なった。その結果、『おもろさうし』では、従来からもいわれているように、「は」助詞は、「は」「わ」「や」と表記されていることがわかった。これらの表記の違いは、音韻上の問題で、文法的にはほとんど問題にしなくてよいものであるが、それでもその語形ごとに、異なる文脈でのとりたての働きをする「は」の使用数をまとめてみると、表1のようになる。

表1　異なる文脈での使用数

は	わ	や	計
336	54	574	994

異なる文脈とは、たとえば「は」を中心にして上接形式と下接形式が異なる、

あたにやは　ねしやり（六九番）

あちは　つかい（一三六七番）

はもちろんのこと、上接形式または下接形式のどちらか一方が異なる、

あよは　いきよれ　ども（一三一六番）

あよは　たちよれども（三九番）

いしはしは　このて（一三三六番）

いしへつは　このて（五二七番）

なども異なる文脈とみなす。しかし、同じ文脈、たとえば、

いたきよらは　おしうけて（五一五番）

の用例は、『おもろさうし』に全部で二五例あらわれるが、これは二五と数えることはしないで、一つと数える（なお、用例の下の括弧の数はおもろの番号を示す。以下同じ）。このようにして数えて示したのが表1である。そのほかに、終助詞としての「は」が二例、「わ」が七例、「や」が一四例ほどあらわれる。これらの数は厳密に検討されたものではなく、統計の方法によっては変更はありうるが、それでも各語形の大方の使用状況をつかむよすがとはなりうるであろう。表1からみると、異なる文脈では、「や」が圧倒的に多く、次に「は」「わ」の順に用いられていることがわかる。本稿では、以下必要としない限り表記上の異なりは無視して、「わ」「や」を含めて「は」で代表させる。

2　『おもろさうし』の「は」も格を表しえない